読書感想文優秀作品

第34回全国高校生読書体験記コンクール　優良賞

老後を生きる

二年一組　田谷　美紗樹

七月半ばのとある夕方、普段と変わらない学校からの帰り道のことだった。小さな十字路の信号が赤に変わり、私は自転車を止めた。ふと顔を上げると、私の前には手をつないで信号待ちをする老夫婦がいた。片足を引きずって、歩くのがやっとな様子のおじいさんと、彼に寄り添い手を握る腰の曲がったおばあさん。絵に描いたような素敵な老夫婦だった。二人の間に会話はない。ただただお互いの手をしっかり握って、そこに立っていた。生温かい風に吹かれ、夕焼けに照らされながらそこにいた老夫婦の姿を、私はどうしても忘れることができないでいる。

信号が青に変わった。歩き出した二人の横を通り過ぎてからも、私はずっと二人のことを考えていた。私もいずれ歳をとる。その時の私の隣には、あのように誰かがいるのだろうか……。目先の大学受験の明確なビジョンさえ浮かばないのに、そのずっとずっと先の老後のことを考えていた。どんなおばあさんになっているのだろうか。そもそもおばあさんになるまで生きているのだろうか。白髪になり顔はしわくちゃになり、色んなことを少しずつ忘れていくのだろうか……。

自転車を漕ぎながら、私はある一冊の本の存在を思い出した。学校の図書館の大好きな英米文学作品のコーナーで、題名に心を惹かれて手に取った一冊、『きみに読む物語』。十代の夏に出会い、恋に落ちた少年ノアと少女アリーの生涯を、ノアの視点で描いた物語だ。彼は二人の出会いから、離れて暮らした十四年間も、その後の長く幸せな結婚生活の間も、彼女がアルツハイマー病にかかって記憶を失ってからも、ずっと彼女を愛し続けた。最愛のアリーが自分のことをすっかり忘れてしまっても、彼は彼女と過ごした一生を綴ったノートを、共に暮らす施設で毎日彼女に読み聞かせ続ける……。嘘のような実話を元にした話で、映画化もされた。そしてこの物語は、私が生まれて初めて涙した物語でもある。

私が小学校に入ってからだっただろうか。私の曾祖母の物忘れが激しくなった。いつかの夏に曾祖母の家へ遊びに行った時、曾祖母は私の父、つまり自分の孫のことを忘れていた。私たちが家に上がるやいなや、「ちょっと、誰かが入ってきたよ。」と不審そうに私たちを見る曾祖母の表情は、当時小学生だった私にとって、とても痛烈なものだった。長年営んでいる温泉の番頭さんで、趣味のピアノを弾きながら歌っていた曾祖母。私が小さい頃、一緒に番頭をさせてもらったり、習っていたピアノを聴かせるといつも褒めてくれた。毎年楽しみにしていた夏の旅行だったが、突然曾祖母に怯えた顔をされ、「誰か知らない子」として扱われたことはとてもショックだった。年に一度しか会う機会がなかったものの、今でもその時の状況、曾祖母の表情を鮮明に思い出すことがある。「もう歳だから仕方がない。」親戚も父も驚いた様子はなく、当たり前のことのように受け流していた。祖父母や両親もいつかはそうなって、歳をとれば私の記憶も消えてゆくのだろうか。それが当たり前なのだろうか。

曾祖母との間に距離を感じた寂しさと衰えることへの不安のやり場がわからず、小学生の私は目の前にあった蠅叩きを無言で振り回すしかなかった。

何の脈絡もなく体験を述べてきたが、帰り道に老夫婦の後姿を見つめていた時も『きみに読む物語』を読んで私にしてはめずらしく涙を流した時も、手持ち無沙汰に蠅叩きを振り回していたあの時と同じ感覚に襲われていた。

曾祖母が見せたあの表情を、もしノアのように何十年、一生をかけて愛してきた人に見せられたとしたら、一体どれほどの悲しみに暮れることだろう。それでもノアのように相手を愛し続け、奇跡を信じて隣で寄り添い続けるようなことができるのだろうか……。そんなことができるとは今の私には到底思えない。そもそも現実にこのような強い愛が存在するのかどうかも私はまだ知らないし、おそらくこの先当分知ることもないだろう。しかしあの老夫婦を見ていた時、その後姿に一瞬ノアとアリーを見たような気がした。あの老夫婦がノアとアリーのような壮大なドラマを抱えているのかどうかはわからない。だが少なくとも、「愛する誰かと共に生きる」先にあるのが、あの夕暮れを二人でゆっくり歩いていく老夫婦の姿なのだろう、と私は勝手に解釈している。言葉が無くても記憶が無くても、隣にいるだけで充分なのだと、この本を読んでから偶然出会った、普段なら気にも留めないような老夫婦の後姿が私に語りかけてきたように思えた。

将来私がどんな人に出会い、どこで何をしてどのように生きているのかなんて全く想像できない。しかし、もしおばあさんになるほど長生きをするのであれば、独り身の老後ではなく大切だと思える誰かと共に生きていてほしいと、未来の私に願うのだった。